



26 海野勝珉《翡翠図花瓶》一対

明治末期〜大正初期 銀・四分一・銅・赤銅・金／象嵌・高彫  
各D二〇・〇、H三五・〇

前掲No.25の鷺と同じく、岩に留まる姿と上空から下降する姿の、動静二態の翡翠を高彫象嵌で表した花瓶である。翡翠は高彫した四分一、銅、赤銅、金を組み合わせ各部位を表し、羽に細かな金象嵌をほどこして、翡翠独特の鮮やかな羽模様を示している。背景の銀地には、川原に生い茂る葦が鋭く繊細な線彫で表されており、左の花瓶の岩に見られる削り取ったような荒い彫り跡と対比させている。水面に浮かぶ水草がわずかに金で平象嵌されているほかは、素地の銀色が大部分を占めており、ただ翡翠のみに鑑賞者の目が向けられるように意図された作りである。

本作もNo.25の花瓶を鍛造した「長養齋」こと藤本萬作により素地が製作されていることが底面の銘より確認できる。藤本は鍛金家・二代鈴木長壽齋の弟子で、東京美術学校鍛金科で指導を行っていた。妻の妹が海野勝珉に嫁いでおり、藤本は海野の義兄でもある。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治の彫金―海野勝珉とその周辺

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 41

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十八年九月二十三日発行

© 2006, The Museum of the Imperial Collections